
研究ノート

日清戦争期における『萬朝報』の中国認識

唐 張 熹

はじめに

古代から江戸末期に至るまで、日本は中国から様々な文化を移入し、古代中国に対して肯定的な中国観を有しており、中国を「文明先進国」として見ていたが、そのような中国認識は明治期以降大きく変容したといわれる（安藤, 1971, p.44）。また、徳川期から明治、大正、昭和期の東亜共同体論までの年代軸に対応した同時代における個々の代表的な知識人の対中認識も変容したことが明らかになっている（松本, 2011）。近代日本における日清戦争（1894-95年）は、十九世紀末の世界的な近代戦争であり、出征した兵士や新聞記者などの日本人の大多数は初めて朝鮮と中国に進出し、朝鮮、中国やその人々を「自分達」と異なり、「異国」「異民族」と感じた（檜山, 2001, p.5）。日清戦争は近代日本の分岐点となる大きな出来事であり、その後、東アジアの地域秩序では従来からの中国優位が崩れ、日本がその再編を主導してゆくことになる（大澤, 2021, p.1）。王（2021, p.31）は、日清戦争は近代日本において中国観が激変した分水嶺であり、日本の世論は日清戦争の勝利によって、中国を侮蔑する否定的な中国観を帯びるようになっていったと述べている。

1892年11月1日に黒岩涙香が東京で創刊した『萬朝報』は、紙面文章を簡明・平易にし、後に発行部数は東京の新聞の中で第1位になって成功し、読者が多く、当時において影響力がある新聞紙となった（山本武利, 1981, p.95-97）。山本文雄（1984, p.2）は黒岩が「論説に、報道記事に、翻案小説に、一管の筆よく多数の読者を引き付けた明解、卒直な文章、多くの新機軸を出して自ら編集したバラエティーに富む紙面」を提供し、「激烈な論調で活発な言論活動」を展開したことが同紙の特徴であったと指摘している。日清戦争期においてそのような『萬朝報』は中国に対し、どのような見方をとっていたのだろうか。本稿では新聞『萬朝報』の社説に掲載された主張を素材として、日清戦争期における『萬朝報』の中国認識を整理・分析し、同紙の中国認識の実証的な検討を試みる。

1. 先行研究

近代以降の日本における中国認識に関する先行研究は、日本側と中国側とも数多く存在している。その中に、歴史的な中国認識を概括した研究や、近代日本における代表的な個人に注目し、その中国認識の形成と変遷を考察する研究がある。その他にも、拙稿（2023, p.29-41）でまとめたように、日本の新聞・雑誌、日本の文学作品、日本の個人の日記や旅行記、日本の外交文書、教科書と日本の映像などのメディアの資料に着目し、そのメディアに表象される日本の中国認識を検討した先行研究もある。

他方、『萬朝報』については、既に多数の研究成果が蓄積されている。従来の研究は、『萬朝報』における概観的研究と経営状況、『萬朝報』に関係する人物と『萬朝報』と近代日本のジャーナリズムの関連を考察してきた(奥, 1993)。代表的な先行研究である山本武利(1984)は、黒岩涙香(周六)の率いる『萬朝報』は労働者など都市の下層民が主な読者であり、激しい政府批判を展開していたこの新興新聞の発展と衰退を考察した。奥(2019)は、明治期における黒岩涙香は大衆新聞といわれる『萬朝報』を創刊し、スキャンダルリズムや社会悪の糾弾で販売部数を伸ばした。「探偵小説の元祖」として知られ、『巖窟王』『噫無情』など翻案小説で人気を博し、権力におもねらず、「大衆」を見据えた黒岩涙香の全体像を奥は描き出している。

また、『萬朝報』を資料として、社会現象や社会問題をめぐる『萬朝報』の言説に関する研究、『萬朝報』に掲載されたコラムを中心とする研究や『萬朝報』と戦争・事変に関する研究もある(町田, 2012a, 2012b)。代表的な先行研究である岩田(1998)は、『萬朝報』の「小学教員の学力(上・下)」と「教員学力問題」という一連の記事を取り上げ、当時における小学校教師の学力問題、教師の自閉という視点から、有力新聞において小学校教師の学力問題が人々の関心を誘引するようになったと考察している。吉崎(2008)(2010)(2011)は、『萬朝報』の「端書ポンチ」という漫画コラムに掲載された漫画6262点を取り上げ、投稿者の人物像や特徴、主題の傾向から、「投稿」という特色を備えた「端書ポンチ」の意義を検討し、採用したものは新聞社の意向を漫画に反映するあり方とは異なり、『萬朝報』における読者の意向も反映するあり方として認められることを指摘している。長谷(2003)の研究では、『萬朝報』で発表された「戦争と道徳」「兵士を送る」「戦争の結果」「列國紛争の真相」「戦時と非戦論」「戦死者の遺族」「戦争と新聞紙」「嗚呼増税」などの記事を利用しながら、同紙の記者であった幸徳秋水の非戦論の展開を論じた。

しかし、明治期における『萬朝報』の中国に対する認識についての実証的な検証は不足している。『萬朝報』を素材とし、中国観を検討している研究には益満(2012)があるが、日清

戦争期について分析考察したものはない。

以上、『萬朝報』に関する先行研究を検討してきた。飯塚浩一はメディア史研究の問題意識と方法の〈まとめ〉をつけるための視点として、メディアが「ある時代・ある社会特有の空間意識・時間意識を作り出す」役割を持つという有山輝雄の視点を紹介している（飯塚 [ほか], 2000, p.57）。メディアの力・機能に着目することにより、明治維新以降における日本・日本人の対中イメージ、中国認識の実像をより明瞭に描き出すことが期待できるのである（許, 2021）。穎原（1994, p.17）は、日本の対外観を考察することが、「現実の外交に直接的・即時的に反映されたか否かはともかく、近代日本の対外態度を解明する上で重要且つ不可欠な作業の一つなのである」と主張している。片山（2009）は、「過去の新聞論調に見られる外国への姿勢を読み解いていくことによって、現在の外国に対する認識を豊かにすることが」新聞論調研究の一つの大きな狙いであると指摘している（片山, 2009, p.203）。明治期に創刊された民衆新聞の『萬朝報』が当時の中国に対して持っていた認識や主張を分析することは重要な意味を持つ。先行研究では『萬朝報』の言説を分析し、近代中国に対する認識を実証的に検証する作業は十分ではない。また『萬朝報』を素材とした日本の対中認識に関する研究は多くない。『萬朝報』で表象されている中国認識を検討することを通じて、日清戦争前後における日本民衆の中国認識がいかにして形成されていったのかを実証的に示したい。

以上を踏まえ、本論文は以下のような構成とする。まず、『萬朝報』の創刊、新聞の定価と販売部数、読者層の構成などを整理する。そして、抽出方法と検討対象について述べ、続いて「中国の現状の認識」と「中国の重要性と将来性の認識」それぞれの視角から中国認識に関する社説の内容を考察し、『萬朝報』の社説から見られる複雑な中国認識のあり方を明らかにする。

2. 『萬朝報』の概要

1892年11月1日に朝報社社長を務める黒岩涙香は東京で『萬朝報』を創刊した。『萬朝報』は、一般の民衆を対象にした新聞として、定価が極めて安くて、紙面も読みやすく、下層階級に読者を開拓することに成功した。その後、学生・知識人・職人や商人などの民衆も『萬朝報』を読み始め、1899年の東京における年間累計の発行部数が2105万、東京以外の地域の発行部数が3499万となった（山本, 1981, p.401）。

『萬朝報』は当時のすべての大新聞と異なり、ある特定の政治勢力と結びつくことはせず、政治的なスキャンダルが中心となった社会記事は不偏不党な主張を発信していた。紙面内容では、1899年にリベラルな新聞記者である内村鑑三、幸徳秋水などが入社することによって、政治記事や論説の比重が年々増加し、当時の新聞で最も進歩的色彩の強い記事を掲載するようになっていった。明治末期から大正初年にかけてが『萬朝報』の全盛期である。

3. 抽出方法と検討対象

1894年6月から1895年3月にかけて、1日1回、朝刊として朝報社より刊行された『萬朝報』においては、合計265本の社説が掲載されている。この中から、当時中国に関する内容を扱った社説は72本があった。その中から、論説の実質的内容を踏まえ、中国観・中国認識を示すものを再抽出したところ、関連する文献は合計35本となり、筆者は全て無署名である。本稿ではこれらを考察対象とすることにした(表1)。「八面鋒」は今日の社説と同じである(高橋, 1989, p.50)。抽出方法としては、本文の中に「清国」・「清兵」・「清廷」・「李鴻章」などのキーワードが出現している文章に注目し、清末中国の現状、当時の代表的官僚や人物の評価と動向に関する討議を取り上げている論説を分析対象とした。なお、原典からの引用に際しては、ふりがなをそのまま付けた。ふりがなに送りがなまで含まれている場合もあるが、原文どおりとした。一部に活字の印刷の関係で判読が困難な部分もあった。また、一部の不自然な箇所などには[]で著者の解説を付した。なお、当時の『萬朝報』の圏点には黒丸(●)と白丸(○)が用いられている。引用の際には、そのまま残すこととした。

表1 『萬朝報』の中国関連社説一覧

年	月	日	号数	コラム	社説表題
1894	6	24	469	八面鋒	朝鮮に在りての日清の事局
	7	4	475	八面鋒	兵力と戦争
		6	477	八面鋒	兵力と談判
		16	485	八面鋒	戦ふか戦はざるか
		27	497	八面鋒	義勇公に奉する日
		8	4	498	八面鋒
	8	12	506	八面鋒	海國の實を現す可し
		15	508	八面鋒	外交上の勝利と軍事上の勝利
		25	517	八面鋒	耐忍力
	9	16	536	社説	戦勝の後を誡む
		26	544	社説	對清問題ハ即ち對歐問題也
		29	546	社説	日本支那及び耶蘇教國の道德
	10	3	550	社説	大日本帝國を知れ
		7	554	社説	赤十字条約を論ず(君子國の道德)
		10	556	社説	對外硬派は決して消滅せず
		12	558	社説	對外硬は今後益々必要なり
		17	562	社説	持重の計
		24	568	社説	對外硬と「對外硬派」
	11	10	579	社説	敵地占領の解
		14	583	社説	連戦連勝
		21	590	社説	東洋問題は東洋自ら処理すべし(一)
		23	592	社説	東洋問題は東洋自ら処理すべし(二)
		25	594	社説	東洋問題は東洋自ら処理すべし(三)
		28	595	社説	我將士は凱歌を奏するに忙はしく 我國民は歡聲を發するに忙はし
		30	599	社説	東洋問題は東洋自ら処理すべし(四)
	12	26	619	社説	敵軍の今後
	1895	2	1	649	社説

1895	2	3	651	社説	清國の将来とトす
		22	667	社説	丁汝昌
		24	669	社説	敵國の現状
		27	671	社説	間諜を論ず
	3	3	675	社説	複讐軍
		24	693	社説	償金と割地
		27	695	社説	李鴻章の奇禍
		29	697	社説	道義益々張る

出典：『萬朝報』に掲載された社説により作成

4. 『萬朝報』における中国認識

4. 1 中国の現状の認識

中国の現状についての認識には批判的な言説がほとんどであった。例えば、日清戦争が開戦する前、清国の対外政策に対し、1894年7月16日に掲載されている八面鋒の「戦ふか戦はざるか」では、「清國の得意とする所は虚喝と遷延とに在り」と述べ、輕蔑を隠さなかった(萬朝報, 1894a, p.1)。そして1894年8月15日の八面鋒「外交上の勝利と軍事上の勝利」も、「貪欲厭なく義理交情の何たるを知らざる」を中国の外交方針と見なし、「長技たる隱険論詐の甘言を逞」くしたという痛烈な批判も述べている(萬朝報, 1894e, p.1)。また、国情については、9月以降、八面鋒を引き継いだ社説「萬朝報解停」[ここでは「あさほう」とふりがなが打たれている]は、中国は「巨邦」であるが、「民情弱なり」と評し、但し、中国の「版圖」「人口」「財力」などを列挙し、その戦備の総数量は日本の十倍であり、日本が「開けて以來未だ」にあっていない「大敵」であるとも述べている(萬朝報, 1894c, p.1)。しかし、八面鋒の「義勇公に奉ずる日」においては、「彪然たる」中国は「安然として内地に高枕し又老朽衰毫」な国であるため、中国に対しては「一植の下に碎盡」できると明言した(萬朝報, 1894b, p.1)。

戦時中においては、『萬朝報』の8月12日号に掲載された八面鋒の「海國の實を現す可し」では、「東洋の強國」を自称した中国は、実は「外形に於て強國」であるにすぎず、中国の軍備については、「陸に於ては羽兵百万を集め」、「海に於ては其の軍艦の備への如き我れに比して優る」こととしても、「其内實に至りては弱き」と、中国の軍事力の実態を見ていた(萬朝報, 1894d, p.1)。そして、戦時中国の戦備補充について、1894年10月17日の社説「持重の計」の中では、「清國の兵器既に盡き、而も直隸灣全く封鎖されたと同一の有様たるが爲め、李鴻章既に其窮を自白せりとは吾人の既に報じたる所とす、彼れの食物に至りては更に兵器よりも甚しき窮を告げん、北清一般の地方は従来多く其食を南部に仰げり」という清軍の戦備不足や深刻な食糧問題について指摘している(萬朝報, 1894h, p.1)。また、当時の中国は「東洋第一の強國にして」も、実は「東洋無比の弱國」であったと評し、中国への蔑視が窺える。

1894年12月26日に掲載されている「敵軍の今後」では、「清兵」は「私利の爲に闘ふ」と記述し、「國家の干城たる」清国兵士の「胸中常に此卑劣不徳の念」を持っていたため、「兵器の鋭」「城池の牢」[城と濠が堅牢であること]「地勢の險」があっても、清国は連敗す

るしかなかったと、清国軍を批判した。そして、清国軍の兵士は「公益心を有せざる」が、「私利心に富むの民」であると書かれている。清兵の私利心に関しては、「誰れか私利心なからん又誰れか公益心あらざらん、然かも清人の心は全然常人の心に反し、常人の時に或は公益を慮るの餘地に於て清人は常に私利を營む、故に清人の私利心は多々益々厚き」になったため、「毎次の戦争に於て清兵の常に城を捨て、逃竄奔逸せる」ことが「公益心に欠けたるを證する」ものと、清国兵には公益心がなかったと酷評した(萬朝報, 1894p, p.1)。また、1894年10月3日の社説「大日本帝國を知れ」は、清兵は「我人民を殘殺し」、「我兵の死屍を寸斷し」、「飲料水中に毒物を流す」と清兵を激しく批判している(萬朝報, 1894g, p.1)。

1894年11月14日に掲載されている社説「連戦連勝」では、中国は「尨大の國土を領し」、「巨萬の人口を有し」、「兵器精ならざるにあらず、富源阜かならざるにあらず」としても、「一朝其貪弱視せる」日本と交戦し、結局は「連戦連敗國土日に蹙まる」ことになってしまったと述べた。その中国の戦敗の原因としては、「軍隊軍艦の訓練操縦に欠くる」こと、「上下の意思相離する」こと、「軍人の生を惜み耻を知らざる」ことを列挙していた。それに對し、日本は「軍備具さに整ひ、兵氣大に振ひ、拳國皆な其心を一にし」、「天に代て此暴國を征するの義擧に出づ」と記している。また、日本は「天に逆ふ」た中国を亡ぼし、「我王帥の連戦連勝」することは当然であったと、日本と對比して中国に対する否定的認識を示しながら、戦争を全面的に支持していた姿が窺える(萬朝報, 1894j, p.1)。1894年11月28日の社説「我將士は凱歌を奏するに忙はしく、我國民は歡聲を發するに忙はし」では、中国は「百戦百敗社稷[國家]日に危く、其將士は逡巡し、其宰相は狼狽し、其天子は將に蒙塵せん。」と述べ、日本と中国は「齊しく東洋に國し、而して喜憂其趣きを異にすること」は「世界の一大奇觀」であると中国を揶揄するような表現をしている(萬朝報, 1894n, p.1)。

一方、『萬朝報』は中国全体に対して批判したのみならず、有力官僚である個人に対する評論も掲載していた。その一人が李鴻章である。清末の代表的政治家の李鴻章は、曾国藩の幕僚として湘軍[湖南省出身者の軍]で活動し、太平軍鎮圧に大きな役割を果たした。太平天国が滅亡した後、洋務派の首領として外交・軍事・経済の運営を進めた。李鴻章は関稅収入をもって武器、軍艦を購入し、北洋水師学堂を創立して淮軍[安徽省出身者の軍]を強化し、北洋海軍も創設した。だが、日清戦争で陸・海軍とも壊滅的打撃を受け、敗戦によって政治的に致命傷を受け、下関条約を調印した後中国の中央政府から一時失脚した。

1895年2月1日の社説「和約果たして就る乎」では、「李鴻章は東洋の豪傑なりと稱す、豪傑たるは即ち未だし、名譽心に驅られたる小策士なること」と評し、有力官僚李鴻章に対する低い評価が述べられていた(萬朝報, 1895a, p.1)。一方、1895年3月27日の社説「李鴻章の奇禍」においては、清国全権として下関で「日清講和条約」に調印してきた李鴻章に対して、「彼の在朝の臣僚」は「中堂[宰相。李鴻章のこと]無能」「中堂軟柔」と評し、李は「歩を日本に譲る多きに過ぐと、和すれば則ち詰られ、和せざれば則ち罵る」といった困難な処境に直面していたと述べている。日清講和會議中に日本人の暴漢に射撃された李鴻章に対して「慧眼風に之を知る、此に於てか彼れは自國の安を慮ると共に併せて一身の安を慮

らざるを得ず」と記述している。さらに、如何なる条件があっても「日本と和するを以て今日清國の急務」であったと認識した李鴻章は「胸中公私両様の安固を計るの餘地を存じ、傍人の毀譽褒貶は毫も之を問はずして、直ちに本國の爲に和を日本と構すべし」とし、「國家あるを知て一身あるを知らざるの偉丈夫」だったと一定の評価もしている（萬朝報、1895d, p.1）。

他方、もう一人の清末の官僚にして軍人であった丁汝昌に関する社説もある。北洋艦隊の海軍提督を務めていた丁汝昌は、日清戦争が起こると北洋艦隊を率いて黄海海戦を戦った。1895年2月に日本軍の水陸からの攻撃を受けた北洋艦隊は力戦及ばず敗北し、丁汝昌は降伏を拒み、服毒して自殺した。1895年2月22日には社説「丁汝昌」が掲載された。その社説は、日本を「掃蕩すべきの勅命を受け、而かも海上の總督たる重任を擔へる」丁汝昌が惨敗を喫したと述べている。戦敗した北洋艦隊は李鴻章の命令によって威海衛に退去した。当時の丁汝昌は「言聴かれず、謀用ひられず」、「身邊を繞り弾丸足下に迫る」といった極めて不憫な地位に陥っていたと記していた。同社説では北洋艦隊が残る「艦體徒に大なりと雖も之を操縦する困難なるは蓋し傍人の想像する能はざる所」にも関わらず、「居然として累日孤嶋に據守」したと、丁汝昌が自殺する前の窮境を記述している（萬朝報、1895c, p.1）。

丁汝昌の自殺について、同社説は「人を救ひ己を潔くせんが爲」の行為であったと評している。丁は「士卒の爲に命を請ひて従容死地に就く、其行事固より中道に副はずと雖も、逃避是れ事とするの清將中にありては固とに異數の士」だったと称賛している。もし丁汝昌が日本に降伏すれば、「當ては蓋し或は一方の裨將」であったが、中国の軍隊において「偶々此良將を得て然かも之を用ゆる能はず、彼をして空しく涙を飲んで當年の田横¹を學ばしむ」と惜しむ感情を表している。最後に、丁汝昌の死は「清國天祐を失ひたる」こととも嘆じている（萬朝報、1895c, p.1）。

以上に述べられているように、『萬朝報』は日清戦争において中国の現状への批判を展開していた。開戦する前に『萬朝報』は清國の対外政策と脆弱な国力を批判している。そして、戦時中には「強国」を自称していた中国の軍事戦備の不足や深刻な食糧不足などの問題を非難する論調が見られた。また、戦中において、『萬朝報』は、ほとんどの中国軍兵士が「私利心」しか持っておらず、「公益心」がなかったことや、訓練不足などの戦敗原因を指摘した。一方、官僚個人への批判と肯定という相異なる評価も見受けられた。特に、李鴻章に対しては低い評価があるものの、下関条約を締結したため、一定の評価もできると評している。また、北洋艦隊の提督丁汝昌を称揚し、彼の自殺に対する遺憾の意が紙面にも見られた。

4. 2 中国の重要性と将来性の認識

4. 2. 1 重要性の認識

『萬朝報』における中国の重要性と将来性についての認識を確認すると、東洋地域にお

ける中国の「重要性の強調」という特徴が見られる。社説「^{たいしんもんだい すなは たいおうもんだいなり}對清問題は即ち對歐問題也」は、日本の外交方針を論じ、「^{たいしんもんだい そのめん おい すなは たいおうもんだい}對清問題は其一面に於ては即ち對歐問題」であったと明言している。そのため、対中問題は対欧問題と同様に「^{たうきやくしや ふたんまたおも}双々相駢んで我國の前に横はれるなり當局者の負擔亦重」しと主張している(萬朝報, 1894f, p.1)。

東洋問題について、1894年11月21日に掲載されている社説「^{とうやうもんだい とうやうみづか しより}東洋問題は東洋自ら處理すべし(一)」の冒頭には次のように書かれている。

^{とうどいりやうおのおのそのくわんく こと またそのりがい おなじ}東西兩洋各々其寰區を異にし、又其利害を同ふせず、西洋問題は西洋の自ら之を處理するに一任して可なり、^{とうやうもんだい}東洋問題に至りては東洋自ら之を處理するの責に當らざるべからず、^{ゆらいぐわだす かたは たにん かんする ゆる}由來臥榻の傍らに他人の鼾睡を容さず、^{こじんかつしか いは どうどう こくざい くわんけい}個人且然り況んや堂々たる國際の關係に於てをや、^{せいやうもんだい おこ あた あへ とうやう くちばし このあひだ はさ え せいはい せいやう ため}西洋問題の起るに方りて、敢て東洋をして喙を其間に挟むを得せしめん乎、余輩は西洋の爲に之を耻づ、^{これ は とうやうもんだい おこ あへ せいやう くちばし このあひだ はさ かよ}東洋問題の起るに方りて、敢て西洋をして喙を其間に挟むを得せしめん乎、余輩復た東洋の爲に之を耻づ、^{はいま とうやう ため これ は なん}何ぞや、寰區を異にし利害を同ふせざる者をして他の社會に對して言議行動を姿まゝにせしむるは、^{ここのどくりつこくいま}即ち是れ路傍の人をして親戚間の關係を處理せしむるに等しければなり

つまり、東洋諸國は「^{せいやく せいりやく}親戚間の關係」であるが、西洋人は「^{このどくりつこくいま}路傍の人」であり、東洋と西洋は別であるべきであると述べている。日清戦争以降の國際情勢について、「^{まますとうぜん せかい ちづ いちじる へんこう どくりつ しゅけん たも わづ にほんし なおよ てう}益々東漸し、世界の地圖に著しき變更」し、「^{あらせいしやうしやう うち かま するくわあい げんしやう てい}獨立の主權を保つもの僅かに日本支那及び朝鮮の三國あるのみ」となったことは論説の中にも叙述されている。しかし、「^{まつた めつぼう あるい きょう ひん}此三獨立國今や争を蕭牆の内に構へ、水火相容れざるの現象を呈」し、「^{せいやうじん て よつ な}印度緬甸」[インド・ミャンマー]と「^{せいやうじん て よつ な}安南暹羅」[ベトナム・タイ]などの国々のように「^{まつた めつぼう あるい きょう ひん}全く滅亡し或は危急に瀕せ」るものもあり、それは全て「^{せいやうじん て よつ な}西洋人の手に依て成されたる」結果であると、西洋に対する警戒心が見られた(萬朝報, 1894k, p.1)。

また、同社説は東洋の問題は「^{せいやうもんだい とうやうみづか しより}東洋自ら之を處理すべきなり」とし、「^{せいやうもんだい とうやうみづか しより}一步も西洋の侵入を容す」ことに強く反対している。同様な観点から、「^{せいやうもんだい とうやうみづか しより}東洋問題は東洋自ら處理すべし(四)」と題する社説は、東洋の問題に関し、東洋は東洋自らを處理すべきであることを再度強調している。東洋国家の中では日本は「^{だん しんこく すん どしやくじやう せいやう あた}文化實力並び備はれる唯一の大帝國」であり、「^{だん しんこく すん どしやくじやう せいやう あた}東洋經營の大任」に当たるべきであると述べている。日本は「^{だん しんこく すん どしやくじやう せいやう あた}斷じて清國の寸土尺壤を西洋に與へて」いることに反対し、「^{だん しんこく すん どしやくじやう せいやう あた}東洋の一員として、且つ東洋全土の平和を保持すべき天職を負へるの覇者として、斷じて西洋の其足を東洋に投ずるを防止すべき」であると表明している。一方、中国はその実情により、「^{ひと このにん あた あた みづか とうやう か ふうは}獨り此任に當る能はざるのみならず、自ら東洋一家に風波を起すを敢んずるの國」になってしまったと批判している。さらに、東洋問題において、中国は「^{とうていていこく とも とうやう へいわ たも にん あた}到底帝國と共に東洋の平和を保つのに當るべからざるの國」であるとの見解も示している(萬朝報, 1894o, p.1)。

他方、「^{せいやうもんだい とうやうみづか しより}東洋の平和」をめぐる論じている「^{せいやうもんだい とうやうみづか しより}東洋問題は東洋自ら處理すべし(二)」では、

日本は「東洋の平和を確保」するために、清国を征し、西洋をして足を東洋に伸ばされないようにすることを建言し、中国を征服することや西洋を排斥することの重要性を表明している(萬朝報, 1894l, p.1)。これに対し、1894年11月25日の社説「東洋問題は東洋自ら處理すべし(三)」においては、日本は中国を「亡ぼして其故土に西洋を導き、却て大害の源を作る、無謀の擧」であると断言している。また、同社説は「唇亡ぶれば齒寒し」と指摘し、中国は日本の「唇の地に位す」るが、「我齒を掩ふ能はず故に清存するも以て我を益せず、我を益せざるの清を亡ぼす可なり」と述べている。一方、西洋を導きて「我齒根を枯らす」に至ることになると、西洋が中国を占有することの危険性を警告している。そこで、日本の安全を守るために、「唯々新たに唇を設けて以て我が齒の温を保たんのみ」という選択肢を提示し、新しい中国を作る必要性があるということが述べられている(萬朝報, 1894m, p.1)。

4. 2. 2 将来性の認識

『萬朝報』における「中国の将来性」に対する認識の一つの特徴は、「将来への警戒」である。日清戦争において中国が敗れた原因としては、1895年2月3日社説「清國の将来と卜す」の中で、中国は「尊大倨傲、自ら稱して中華と云ひ、他國を目するに夷狄」と蔑称し、「中華は夷狄を敵とするに足ざるの迷信を脱」しないまま、その「迷信は一轉して滿心と爲り、滿心は再轉して士氣沮喪と爲り、士氣沮喪よりして國防放擲と爲り、國防放擲よりして兵制紊亂と爲り、兵制紊亂よりして連戦連敗」したとの結論を述べている。しかし、「尨大の國土民衆を擁して」いる中国は「世界の大国なり、其人口は即ち我に十倍し、其領土は即ち我に三十倍」であるとも記している。今後の中国は「尊大の迷信を去」り、まず「放擲せる國防威嚴にせん、紊亂せる兵制を整へ」、「敵愾心を作興」すれば、中国は自らの弱点を補うことができ、膨大な国土と民衆を擁していることから、「五年若くは十年を過ぐの後、日清若し兵を交ゆることありとせば、彼我勝敗」を予測しがたいと、将来の中国は軽視できないとの判断を示している(萬朝報, 1895b, p.1)。

他方、『萬朝報』における「中国の将来性」に対する認識のもう一つの特徴は、「将来への期待」である。但し、その期待は、日本による統治が中国にもたらす利益の我田引水の主張であった。1894年11月10日に掲載された社説「敵地占領の解」の中に、日本が占領する中国地域について、「占領地に在る清國人民の幸運なるを喜ぶ」ことを予想し、住民は「不幸にして清帝の治下に立ち、生命ありと雖も之を全ふする能はず、財産ありと雖も之を安んずる能はず、權利自由凡て自ら之を保護する能はずして一に貪婪放姿なる奸吏の蹂躪に委す」と述べている。今後それらの地域は日本により、「民政廳を彼地に置き」、「諸般の政務を執行」し、「夫れ數度の國際法會は詳かに占領地に在る人民を待つ道の定め、敢て或は不法苟虐の事あるを許さず、即ち彼れ占領地人民の生命は之れより始めて全けん其財産は之れより始めて安けん、其權利自由は之れより始めて堅固なるを得ん」とする青写真を描いている。将来の占領地は「益々占領の範圍を擴むるは益々幸福を清人に與ふる」と楽観的で身勝手な見方をしていく(萬朝報, 1894i, p.1)。

以上のように、『萬朝報』には中国の重要性の認識が見られる。紙面では日本の対中政策と西洋に対する政策は同様に重要な対外対策であることを強調している。東洋問題については、東洋と西洋を区別すべきであり、西洋への警戒感を表明している。また、日本を東洋「経営」のリーダーに位置づけ、「東洋の平和」を守る責任を取らなければならないと主張している。さらに、中国古典の唇亡齒寒論に鑑み、日本自身の安全のために、新しい中国を作る必要があるとの見解が紙面にも掲載されている。また、中国の将来について、『萬朝報』は中国の弱点を列挙しているが、これらの弱さを補強すれば、将来においては、軽視できない国であるとの論調も窺える。また、日本が清を占領すれば、中国占領地の人々は日本の改造により、益々期待できるという将来の予測もしている。

おわりに

本稿では明治期に発行された『萬朝報』の論調を考察し、紙面に掲載されている中国に関連する社説を取り上げ、日清戦争期における中国に対する認識を実証的に分析した。

十九世紀末に発行された『萬朝報』には、「大新聞」²と「小新聞」³の要素が混在していたが、主に三面記事で構成されており、同時代の有力新聞紙を超える平均発行部数を獲得した。他の新聞紙と比較しても安価で販売されていた『萬朝報』は、一般の民衆を対象にし、職人・小商人などの都市中下層の読者を開拓することにも成功した。

『萬朝報』紙上では、当時の中国の国内外の情勢を背景に中国の「現状の認識」と「重要性和将来性の認識」に分かれた議論が展開されていた。『萬朝報』には、中国現状を批判する言論が掲載されていた。一方、中国の「重要性和将来性への認識」に関しては、東洋問題における中国の重要性を強調する論調が多くあり、中国の将来は軽視できないことを認め、中国をけん引して西洋世界と対抗しようという主張もあった。日清戦争における日本の新聞紙の中国認識に関する研究には多くの蓄積があるが、実際に『萬朝報』の社説に基づいて分析した研究は見当たらない。本研究は「現状への批判」と「重要性和将来性への主張」に関する認識に注目し、その『萬朝報』の対中認識を明らかにした。このようにこれまでの先行研究の結果を補充した点に本研究の学術的な貢献がある。

この時期『萬朝報』の中国認識には、もっぱら中国を批判しながら蔑視しただけではなく、一定の評価を下した部分もあった。たとえば、『萬朝報』の中国認識においては、李鴻章や丁汝昌といった清末官僚が、当時の中国に貢献したとある程度評価している。これは中国側の認識とはだいぶ異なる。たとえば北洋艦隊を失った丁汝昌は、光緒帝により財産没収を命じられ、自決後は黒の囚人服を着させられ埋葬も長く許されないなど苛烈な処分を受けた⁴。もっとも、この時期の日本の新聞・雑誌では、中国人では唯一人とも言っているくらい、丁汝昌は高く評価されていた(金山, 2014, p.75)。そう考えると、丁汝昌については、『萬朝報』は大方の日本のマス・メディアと同じ見解を示したと言える。

『萬朝報』は『東京毎夕新聞』に合併され、1940年10月1日に廃刊となった。本稿では、日清戦争における『萬朝報』の中国認識を明らかにしたが、半世紀に近い48年間にわたっ

て同紙が発行され続け、どのような中国認識を発信していたのかについては、今後の研究課題として引き続き考察していきたい。

【注】

- 1 田横は中国戦国時代末の武将。秦の滅亡後、齊の田市は膠東王、田都は齊王、田安は済北王に封建されたが、項梁を見殺しにした田栄は封建されず、項羽を怨んだ。のち栄は田市と田安を殺して齊王となったが、項羽に殺された。そこで栄の弟の横は栄の子の広を齊王に立てた。漢王劉邦の降服勧告に応じると、漢の將軍韓信が蒯通の計謀で齊を急襲したため、齊王は漢の使者の酈食其を煮殺して反撃に出た。韓信が齊王広を虜にすると、横は自立して齊王となったが、韓信に齊を奪われた。劉邦が前漢王朝を創設すると、横は誅殺を恐れて東方の海上の孤島に逃亡した。高祖劉邦は横を赦して長安に招いたが、横は洛陽の手前で自ら首を刎ねて死んだ。高祖が横を王者の礼式で葬ると、その従者もまた自殺し、孤島にいる横の配下の者たちもみな自殺した。高祖は田横とその賓客たちの高節を称えた。（『ブリタニカ国際大百科事典』を参照）。
- 2 大新聞は、明治前期の新聞の種類の一。大きい用紙を使い、文語体の政治議論を中心に、知識人を読者対象とした。東京日日新聞・郵便報知新聞などがその代表。デジタル大辞泉を参照。<https://japanknowledge-com.libjiu.idm.oclc.org/lib/display/?lid=1001000034695>（2023年9月28日更新）。
- 3 小新聞は、「明治前期に発行された小さな紙面の新聞。総ふり仮名の平易な文章で、世間で起こった事件や花柳界のうわさなどを載せ、一般大衆を読者対象とした」。デジタル大辞泉より引用。<https://japanknowledge-com.libjiu.idm.oclc.org/lib/display/?lid=1001000034695>（2023年9月28日更新）。
- 4 丁汝昌の処遇については、郭笙敏(2014)「北洋海軍提督丁汝昌の生前身后事」[北洋海軍提督丁汝昌の生前・死後に起きたこと]『档案天地』09.25-29を参照『档案天地』は中国河北省档案局出版社が刊行する学術雑誌である。なお、明治39（1906）年10月10日付けの『やまと新聞』の記事「丁提督追賞説」（3面）では「丁汝昌の最後は本邦人の同情を得たるも死後の罪を数へられ不祀の鬼」とされたと、日中の評価の違いを浮き彫りにしているが、清国においても海軍の復興と共に名誉回復の動きが進んでいる様子が伝えられている。なお、明治後期において『やまと新聞』は東京の有力紙の一つであった。

【参考文献】

〈和文文献〉

- 安藤彦太郎 (1971) 『日本人の中国観』 勁草書房。
- 飯塚浩一「ほか」(2000) 「メディア史研究の方法めぐって」『マス・コミュニケーション研究』57。
- 岩田一正 (1998) 「『万朝報』「小学校教師の学力問題」に見る教師文化の構造」『東京大学大学院教育学研究科紀要』38, 337-345。
- 穎原善徳 (1994) 「日清戦争期日本の対外観」『歴史学研究』663, 17。
- 大澤博明 (2021) 『明治日本と日清開戦：東アジア秩序構想の展開』 吉川弘文館。
- 奥武則 (1993) 「新聞という近代 - 『万朝報』研究序説」『社会科学研究』39(2), 419-449。
- 奥武則 (2019) 『黒岩涙香:断じて利の為には非ざるなり』 ミネルヴァ書房。
- 金山泰志 (2014) 『明治期日本における民衆の中国観：教科書・雑誌・地方新聞・講談・演劇に注目して』 芙蓉書房出版。
- 片山慶隆 (2009) 『日露戦争と新聞—「世界の中の日本」をどう論じたか—』 講談社。
- 許丹青 (2021) 『1920、30年代の日本出版文化における対中国イメージと中国認識』 [博士論文、岡山大学] (https://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/ja/list/thesis_types_with_file/%E5%8D%9A%E5%A3%AB%EF%BC%88%E6%96%87%E5%AD%A6%EF%BC%89/item/62182) .

- 拙稿 (2023) 「近現代日本人の中国認識に関する中国側研究のレビュー—日本のメディア資料に基づく中国側の2002-2021年の研究を中心に—」 『言語文化研究』 2, 29-41.
- 高橋康雄 (1989) 『物語・万朝報—黒岩涙香と明治のメディア人たち』 日本経済新聞社.
- 町田祐一 (2012a) 「日本の新聞はいかに「苦学生」を語ったか:1910年代の『萬朝報』を中心に」 『史叢』 87, 16-32.
- 町田祐一 (2012a) 「日本の新聞はいかに「苦学生」を語ったか:1910年代の『萬朝報』を中心に」 『史叢』 87, 16-32.
- 町田祐一 (2012b) 「近代東京と苦学生問題:明治中後期の『萬朝報』記事から」 『メディア史研究』 31, 53-71.
- 益満隆行 (2012) 「『萬朝報』に見る文明認識の変化:義和団事件関連報道の変遷から」 『専修史学』 52, 32-85.
- 松本三之介 (2011) 『近代日本の中国認識:徳川期儒学から東亜協同体論まで』 以文社, 126.
- 長谷百合子 (2003) 「幸徳秋水の非戦論—『萬朝報』を中心に」 『初期社会主義研究』 (16), 107-125.
- 檜山幸夫 (2001) 『近代日本の形成と日清戦争—戦争の社会史』 雄山閣出版.
- 山本武利 (1984) 「『萬朝報』の発展と衰退:『萬朝報』 解題・解説」 日本図書センター.
- 山本武利 (1981) 『近代日本の新聞読者層』 法政大学出版局.
- 山本文雄 (1984) 「『萬朝報』 復刊の意義」 日本図書センター.
- 吉崎真弓 (2008) 「『萬朝報』の「端書ボンチ」—1907年から1916年までの主題の傾向と常連投稿者」 『芸術学研究』 14, 65-74.
- 吉崎真弓 (2010) 「『萬朝報』の「端書ボンチ」—1917年から1924年までの常連投稿者とその特徴」 『近代画説: 明治美術学会誌』 17, 20-37.
- 吉崎真弓 (2011) 「『萬朝報』の「端書ボンチ」にみる「国民」「市民」の登場」 『芸術学研究』 16, 81-90.
- 萬朝報 (1894a) 「戦ふか戦いざるか」 萬朝報1894年7月16日.
- 萬朝報 (1894b) 「義勇公に奉ずる日」 萬朝報1894年7月27日.
- 萬朝報 (1894c) 「萬朝報解停」 萬朝報1894年8月4日.
- 萬朝報 (1894d) 「海國の實を現す可し」 萬朝報1894年8月12日.
- 萬朝報 (1894e) 「外交上の勝利と軍事上の勝利」 萬朝報1894年8月15日.
- 萬朝報 (1894f) 「對清問題ハ即ち對歐問題也」 萬朝報1894年9月26日.
- 萬朝報 (1894g) 「大日本帝國を知れ」 萬朝報1894年10月3日.
- 萬朝報 (1894h) 「持重の計」 萬朝報1894年10月17日.
- 萬朝報 (1894i) 「敵地占領の解」 萬朝報1894年11月10日.
- 萬朝報 (1894j) 「連戦連勝」 萬朝報1894年11月14日.
- 萬朝報 (1894k) 「東洋問題は東洋自ら処理すべし (一)」 萬朝報1894年11月21日.
- 萬朝報 (1894l) 「東洋問題は東洋自ら処理すべし (二)」 萬朝報1894年11月23日.
- 萬朝報 (1894m) 「東洋問題は東洋自ら処理すべし (三)」 萬朝報1894年11月25日.
- 萬朝報 (1894n) 「我將士は凱歌を奏するに忙はしく我國民は歡聲を發するに忙はし」 萬朝報1894年11月28日.
- 萬朝報 (1894o) 「東洋問題は東洋自ら処理すべし (四)」 萬朝報1894年11月30日.
- 萬朝報 (1894p) 「敵軍の今後」 萬朝報1894年12月26日.
- 萬朝報 (1895a) 「和約果たして就る乎」 萬朝報1895年2月1日.
- 萬朝報 (1895b) 「清國の將來と卜す」 萬朝報1895年2月3日.
- 萬朝報 (1895c) 「丁汝昌」 萬朝報1895年2月22日.
- 萬朝報 (1895d) 「李鴻章の奇禍」 萬朝報1895年3月27日.
- 〈中文文献〉
- 王美平 (2021) 『日本対中国的認知演変: 从甲午戦争到九一八事变』 社会科学文献出版社.

(たんちょうき: 城西国際大学人文科学研究科比較文化専攻在籍)

Perception of China in the Japanese Newspaper,
Yorozu Chōhō, during the Sino: Japanese War

Tang Zhangxi

From ancient times to the end of the Edo period, Japan imported various pieces of Chinese culture. Most Japanese had a positive perception of China. However, the perception of China has transformed since the Meiji period. Moreover, Japanese perception of China changed drastically after the Sino-Japanese War(1894-95).

Yorozu Chōhō, a Japanese newspaper for the general public, had a major influence on the Japanese perception of China at that time. Based on an analysis of views on China depicted in *Yorozu Chōhō* editorial articles, this paper examines Japanese perception of China during the Sino-Japanese War. This study consists of two parts as follows: (1) study on *Yorozu Chōhō*'s perception of China based on current situation in China; and (2) study on the importance and future of China.